



歴史回廊

第12部・近世の自然と暮らし⑦

島しょ部の村々では、陸地部と比べて林野面積が小さく、村共有の野山より村民が個別に所持する腰林のほが広い。

■割り木や松葉販売

腰林の植生は、例えば豊田郡の場合、幹回り一尺（約三十センチ）にも満たない小松が中心で、陸地部より一段と伐採が進んでいる。水運の便に恵まれ、割り木や松葉を燃料用に広く販売し、人々の収入にできたからである。

大坂や各地の城下町・港町のほか、さらに全国シエアを独占しつつある瀬戸内製塩業など、需要はいくらでもあった。製塩燃料には、枝打ちで得られる、松葉のついた小枝が最適という。

あまり水田に恵まれない海

製塩業などの燃料に

島々での腰林利用

辺や島々では、その収入は貴重である。それだけに、自由に販売すればたちまち資源の枯渇を招く。広島藩では、一般に販売目的の伐採や枝打ちについて、腰林所持者から逐一申請させ、村ごとに年間の許可数を制限していた。塩田と燃料供給の村々を組み合わせる工夫も行った。

しかし、一方で島々では段々畑の開墾が進み、草山不足にも拍車がかかる。畑の肥料は、もっぱらアマモやガラモ（ホンタワラ）などの海藻、さらには都市の塵芥まで投入する。島の周りの藻場には、すでに利用権が張り巡らされていた。

■18世紀末から石炭

十八世紀末ごろから、製塩に九州から石炭が導入される。燃料供給の村々からは、煙害もあって補償を求め、公害反対運動の先駆とも言われる。化石燃料利用の新たな段階が、目の前に迫ってきている。

さて、これまで瀬戸内地域を舞台に、江戸時代においても、人間活動が動物や林野に相当の影響を与えたことを見してきた。昔の林野は、ほんのわずかずつたまっていく小さな石油タンク群のようなものである。地域の特性に応じ、さまざまな利用の姿があった。

では、自然豊かな中国山地ではどうであろうか。そこではたたら製鉄が行われている。燃料をどうしたかが、やはり気になるところである。

（広島大教授・佐竹昭）

土曜日に掲載します



復元された製塩の釜屋。燃料をたぎ、濃縮塩水を煮詰めた（鳴門市・福永家）